



サレジオ会宣教ニュース

サレジオ会宣教部門による
サレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



友人の皆さん、

5月になりました。最初に急いで出かけられた方、助けを必要としていたエリザベトの家へ「肉となったみことば」をもたらすために出かけた方から光をいただきましょう。それは、一つひとつのアヴェマリアのうちに私たちの心に寄り添う福音のイメージです。私たちのためにお祈りください、といつも願っているその時、私たちの地上の使命が幕を閉じる、「アーメン」の時に至るまで。

今月、ナイジェリアにいたとき、私たちはオンドからアクレに至る50キロほどの道のりを歩き、キリスト者の扶け聖マリア教会へ巡礼しました。1000人近い子ども、若者が夜通し歩き、踊り、歌い、すべてのカトリック信者の母、カトリックでないすべての人にとって同じように母である方と共に、ノンストップの賛美をささげました。マリアこそ、いちばんに出かけて行く方です；マリアにとって、そこにいるのは息子、娘、互いに兄弟姉妹である子らでしかありません；そして、「アーメン」の時に、いちばんに出迎えてくださるのもマリアです。9歳の時の夢のジョヴァンニのように、共に歩んでいただきましょう、パタゴニアから北京に至るまで、私たちの最後の息に至るまで。

Silvio L.

■ 養成顧問
シルヴィオ・ロτζジャ神父, SDB

パラベク：責任ある取り組みと適応力、 共同体の支えによって食糧が確保される

難民キャンプと言うと、私たちの脳裏には、飢え、犯罪、栄養失調などのイメージがすぐに浮かぶでしょう…… しかし、窮乏の状態と言うだけでは、パラベクのキャンプの生活を十分に伝えていません。困難を乗り越える強さ、適応力、共同体意識についても語る事ができるのです。人が生活していくために働くふつうの社会に同じく、食糧は日々の生活の大切な一部です；難民の家族は食糧支援を受けます。それは通常、とうもろこし粉、豆、調理油などで、家族を養うひと月分が配給されます。配給量は必ずしも十分ではなく、品数も限られています；人々が生活を営む土台になります。また、キャンプの中では小さな市場が運営され、商人が野菜やキャッサバ芋、ピーナッツ、時には魚を売っています。臨時の仕事や小規模の事業でささやかな収入を得たり、親族の支援があったりする人たちは、配給される食糧にそういった食品を加え、食生活を補っています。こうして食事は、簡素でありながらも、時には変化のあるものになります。例えば、ある家庭で、ある日はポショ¹と豆を料理し、翌日はそれに野菜かトマトを加えるかもしれません。また、自立への努力が明らかに見られます。特に雨季の間、暮らしているシェルターの周りに小さな菜園を育てている家族もあります。収穫量は限られていますが、栄養を得られ、帰属感を持つことができます。挑戦は残されています。例えば、食品の種類が少なく、質も十分でないこと、基本的な保存や調理の環境が整っていないことなどです。それでも人々は、希望をもって、生活を営み続けています。

すべての人が食糧を得られるようにするという目標に照らすとき、それは単に数量の問題にとどまらず、質と安定的供給の問題でもあるということ、そして、そのことを認識し、責任をもって取り組む必要があることをパラベクは思い起こさせてくれます。無駄を無くすことは、物が豊かにあるところだけでなく、穀物一粒さえ無駄にできない難民キャンプでも、大切なことです。食糧がそれを最も必要とする人々に届き、賢明に活かされるよう、大規模な生産者から個々の消費者に至るまで、共に責任をもって取り組む必要があります。質の良い食糧を手に入れられることは、特権ではなく、すべての人の基本的な権利でなければなりません。

■ AGLアフリカ大湖水地方管区
ウガンダ、パラベクのサレジオ会聖キジト共同体
院長 ウバルディーノ・アンドラーデ・エルナンデス神父, SDB

¹ ポショとは、とうもろこしの粉に熱湯を混ぜて練り物状にし、ほかの野菜に添えて食べるアフリカの伝統食。

振り返りと分かち合いのために

■ 十分な質の良い食糧を皆が得られるわけではないこの世界で、私にとって「責任ある食」とは？



南イタリア、 若い宣教師の「栄養」



ギー=ロジェ、アンリ、イタリアでの宣教活動で、お二人に「栄養」と力をくれるものは何ですか？

ギー=ロジェ 私たちの力は、とてもシンプルで深い福音的な源泉から湧きあがります：毎日、若者、特に家庭の問題や勉強、社会面で困難に直面している若者と共に在ること；祈りに忠実であること；教育が希望のわざであると信じる教育共同体；そして何よりも、神の現存です。それは、若者たちが見せてくれる小さな優しい行いや、彼らの進歩、その表情に戻る笑顔のうちに表れます。

アンリ 宣教活動は、嵐や風、雨に打たれ、陽の光を浴びる、木になる実のようなものです……さまざまな挑戦に直面しても、いちばん大切なことは木につながり続け、しっかりとした根を持つことです。そうです、ゆだねられたミッションに忠実であり続けるために、私は祈りと秘跡を通して神との親しい絆を養い、そして自分が遣わされた人々と共に歩みながら働いています。

毎日出会う若者たちが、いちばん渴き求めていることは何ですか？

ギー=ロジェ 若者たちは、本物の人間関係を渴望しています。裁くことなく耳を傾けてくれる人、自分自身よりも先に自分を信じてくれる人、そのような大人を求めています。感情面で安心感を求めています - 多くの家庭が困難に直面しているので - 希望、自分の才能を見いだす機会、積極的に生きる霊性を求めています。ユースクラブでは、ありのままの自分でいられ、おかしな失敗によって決めつけられることなく、喜びが贅沢ではなく権利である場を若者たちは見いだします。

アンリ 毎日、奉仕職の中で出会う若者たちは、社会における自分のアイデンティティーを前向きに形作ろうとしています。私がこのように言うのは、現代社会が善と悪を同じ秤にかけ、真実な選択も、たまたま選んだことのようになってしまうと思うからです。そのため、拠りどころを見いだせるように若者を助け、さまざまな選択を行う際に導くために、真実な生き方をもって共にいることは不可欠です。

お二人それぞれから、カリエロ11の読者に伝えたいことはありますか？

ギー=ロジェ 「おそれずに小さなことから始めて」ということです。ミッションは壮大な計画からではなく、優しいまなざしや忠実に共にいることから生まれることを、私たちは毎日学んでいます。温かく迎えられ、話を聞いてもらえた、大切にされた若者が感じる場所で神の国は成長しはじめます。一つひとつの優しい行い、分かち合われるほほえみが人生を変えることができると信じ続けてください。そして忘れないでください：「宣教の使命・ミッションは、まず何よりも赴く場所ではなく、自分のいる場でどのように愛するかなのです」。

アンリ 宣教師になって数年を経て思うのは、さまざまな価値について、神に導きながら、サレジオのカリスマや人間として大切な価値について若者たちに語るのをやめてはいけないということです。現代のテクノロジーを活用する際の倫理的なアプローチを忘れずに。聖パウロのテモテへの言葉を実践に移すことは、私たちにかかっているのです：「御言葉を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを続けなさい。忍耐と教えを尽くして、とがめ、戒め、勧めなさい。……何事にも身を慎み、苦しみに耐え、福音宣教師の働きをなし、自分の務めを全うしなさい。」(2テモテ4・2-5)



ムトンボ・ギー
=ロジェ SDB



ムフェレ・アンリ
SDB

私はコンゴ民主共和国のキンシャサ出身です。サレジオ会の生き方との最初の出会いは、サレジオのカリスマを紹介する本でした。それがきっかけとなり、サレジオ会が活動しているマシーナで開催された集いに参加しました。ここイタリアに来る前は、ルブンバシのドン・ボスコ大学で哲学を勉強していました。今私は、ヴィボ・ヴァレンティアにいます。

私はコンゴ人（コンゴ民主共和国）で、2021年以来、ドン・ボスコのサレジオ会会員です。最初にサレジオ会を知ったのはキンシャサでのことです。修練生のとき、養成担当者だったヴィルジルの導きのおかげで宣教師の道を選び、2024年から南イタリア管区(IME)にきています。クラブリア - バジリカータ・プロジェクトのためです。現在、実地課程生として、コリリアーノ・ロッサーノにいます。



5月
サレジオ
宣教の
祈りの意向

食糧
すべての人が食糧を得られますように。
(教皇レオ十四世の祈りの意向)

大規模な生産者から個々の消費者に至るまで、皆が食べ物を無駄にしないことに取り組み、すべての人に質の良い食べ物が確保されるよう、祈りましょう。
(サレジオ会の宣教の祈りの意向)

イタリア